

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

サッカー人の復興メッセージを被災地へ

関西大学サッカー部「仙台のスタンドを一周できるフラッグを！」

- 体育会サッカー部
辻村 修太郎 さん 環境都市工学部4年次生
中田 彩薫さん 商学部4年次生
辻 俊行 さん 法学部2年次生

被災地に向けたメッセージが書き込まれたフラッグ。(左から)辻俊行さん、辻村修太郎さん、中田彩薫さん



メッセージを書く「関西大学カイザーサッカースクール」の子どもたち



大震災の被害に遭われた方たちに何かできることはないか？復興に対する想いをカタチにして伝えたい。そう思った関西大学サッカー部の部員たちは、早速動き出した。「サッカーを愛する大勢の人たちのメッセージを集めたフラッグ(大きな布)をつないで、Jリーグ・ベガルタ仙台のホームスタジアムのスタンドを一周させよう」

始動は早かった。東日本大震災の起きた翌日、「サッカー部で何かできたらいいな」と練習中に仲間と話していた副将の辻村修太郎さんは、その夜、部員に「明日集まって相談しないか」とメールを送った。四十数人が参加したミーティングで、最初は募金の話が出た。しかし、義援金は大学でも募るし、学内に募金箱も設置される。「お金ではなく、サッカーとつながりがあって、想いをカタチにできるものがない」と話し合っているうちに、いろんな意見が出てきた。

マネージャーの中田彩薫さんも、「何かしたいという気持ち」で参加した。「震災からしばらくは誰もが被災地のことを考えるけれど、やがて時間がたつと忘れられていくでしょう。サッカーのように心をつなげて、長期的に取り組めるものがない。みんなにメッセージを書いてもらった大きな布をいっぱい集めようという話になりました。最終的には、ベガルタ仙台のホームスタジアムであるユアテックスタジアム仙台のスタンドを一周できるくらい、メッセージを集めるつもりです」

関西大学サッカー部は今年1月、全日本大学サッカー選手権

大会で優勝し、43大会ぶりに日本一の栄誉に輝いた。一方では、地域の子どもたちを対象に「関西大学カイザーサッカースクール」を開いている。淀川河川敷の清掃活動や、昼休みのキャンパス清掃など、ボランティア活動にも積極的に取り組んでいる。メッセージを集めるにあたって、公式戦や練習試合の相手チームのメンバーにも書いてもらい、試合前に整列してフラッグと一緒に写真を撮っている。また、サッカースクールの子どもたちと保護者にも協力してもらっている。

「どんなメッセージにしようかと、子どもたちが一所懸命考えながら書いてくれているのを見ていると、やってよかったなあと思います」と中田さん。辻村さんは「スタンド一周分のメッセージを集めるには、これから長い年月がかかります。僕らが卒業しても、後輩たちが続いてくれたら、いつか目標は達成されるでしょう」と、長期戦になることを見据えている。もちろん後輩たちもそのつもりだ。

辻俊行さんは「僕らがやっていることに、他の大学の人たちが一緒に加わってもいいと思います」と言う。「この大震災の復興に向けて、関大サッカー部がかかわり続けるということが大事だと思うのです」

3人は、再開したJ1リーグのベガルタ仙台のホーム開幕戦(4月29日、対浦和レッズ)に合わせて、30枚の布をつなぎ合わせたものを届けに仙台まで行った。今後、日程は未定だが、ホームの試合で掲示されるそうだ。カラフルな布には大きな字のメッセージも入っている。「その笑顔が明日を変える力になる」

国際的な災害救援活動を担う

「『人を助けたい』という思いは世界共通です」

- 日本赤十字社 事業局 国際部 国際救援課長
森 正尚 さん 法学部 1991年卒業

日本赤十字社の森正尚さんは、ニュージーランド地震の被災地で救援活動を行っている最中に東日本大震災のニュースを聞いた。森さんはこれまで、インド、イラン、スマトラ島沖、パキスタン、ハイチの地震やミャンマー・サイクロンなどの救援に携わってきた。関西大学で国際人権法や国際人道法を学んだことが、今の災害救援・復興支援の仕事につながっていると語る。

小学校の3年間をアメリカで過ごした森さんは、関西大学の学生時代には英会話サークルに所属し、地元の奈良市とオーストラリアの町との民間交流ボランティアの活動にも熱中した。そもそも関大法学部を志望したのは、国際法に興味があったから。当時の法学部には、国際法研究で世界的に知られていた藤田久一教授(現名誉教授、竹本正幸教授(故人)が名を連ねていた。

「国際法の中でも国際人権法や国際人道法が面白くて、一生懸命勉強しました。藤田先生の教えを受けなければ、日本赤十字社に入るという道もなかったでしょう。人の命と健康を守る赤十字社の仕事自体が国際人道法の基本的な考え方と合致しており、関西大学で勉強したことが今の仕事にダイレクトにかかわっています」

入社後、阪神・淡路大震災で初めて救援活動を経験し、「人生観ががらりと変わった」と言う。地震当日、救護班の一員として神戸に入った。徹夜で避難所を回り、活動を続けた。

「被災者の方は感謝してくださったのですが、技術も経験も足りず、課題が残りました。しかし、人の命を救うのだという強い思いが、臨機応変な活動につながることも分かりました。いくら救おうと思っても、救えない命もある。でも、頑張れば救える命もある。このことをしっかりと意識して、我々が環境整備をすることによって、医師や看護師がベストのパフォーマンスを発揮できるのです」

森さんは海外の救援活動において、まず仮設診療所を立ち上げる役割を担い、初動第一班として被災地に入ることが多い。支援の在り方や期間を決め、地元の人と交渉し、世界各国の赤十字社と連絡調整を行う。



恩師の藤田久一先生と



ニュージーランド地震救援の出発時、関西空港での取材風景

森 正尚—もりまさなお
 ■1968(昭和43)年、奈良県生まれ。91年関西大学法学部卒業、日本赤十字社に入社。インド地震(2001年)、イラン地震(2003年)、スマトラ島沖地震・津波災害(2004年)、パキスタン地震(2005年)、ミャンマー・サイクロン災害(2008年)、ハイチ地震(2010年)などの救援に派遣される。現在、同社事業局国際部国際救援課長。

「人を助けるということでは、文化や宗教の違いはほとんど関係がありません。どこの国へ行っても、地元の人たちを含めてみんなが一つになり、『人は人なんや』と感じる瞬間があります。被害に遭った方々の口から出るのは、悲しい、つらい、しんどい、といった言葉です。ところが、しばらくすると、何とか自分たちの力で立ち上がらなくては、とおっしゃるようになる時が来ます」森さんは、ニュージーランド地震の際に日本赤十字社が派遣した「こころのケアチーム」のリーダーを務めた。続いて東日本大震災が起き、被災地の石巻市にも飛んでいった。「これが日本かと、言葉を失いました。しかし、何とかしなくてはいけないと立ち上がってこられている人々の姿に、一筋の希望を見いだせると思います」



ハイチ地震救援にて

今後、復興支援などのボランティアに参加する学生にひと言アドバイス——。「被災地の方に何かをしてあげようと考えがちですが、現場で活動すればするほど、人ってすごいなあ、強いなあ、こんなにつらい体験をされているのに、ありがとうと言えるのかと、むしろ教えられることが多い。目の高さを相手に合わせて、お話を聞かせていただくという謙虚な姿勢を忘れないでください」